

非・戦争詩人エリオット

—「チェスの遊び」と「凱進行進」にみられる第一次大戦の断片—

T. S. Eliot as a Non-War Poet: Some Fragments of the First World War Represented in “A Game of Chess” and “Triumphal March”

吉 村 圭

Kei Yoshimura

キーワード：T. S. エリオット，第一次世界大戦，英文学，英詩

序

一般にエリオット (T. S. Eliot) は大戦を描かなかった詩人と考えられている。森山泰夫がいうように、エリオットは「二つの大戦の時代に詩作をつづけながら、戦争の悲惨を描きもせず、これに対する怒りも表さなかつた」のである (森山 512-13)。しかしながら星野美賀子が指摘するように、第一次大戦はエリオットが「詩人としてのアイデンティティを確立したと思われる」時期である (星野 142)。¹ つまりむしろエリオットが大戦をテーマとして取り上げなかつたこと自体極めて奇妙なことであり、また興味深くも感じられるのである。そのため特に近年、大戦がエリオットに与えた影響を読み解く研究が盛んに行われており、例えば心理学的観点からエリオットと大戦によるトラウマについて論じた Carl Krockel の *War Trauma and English Modernism* や、戦時下の「死体」の取り扱いに着目しエリオットの作品を読み直した荒木映子の『第一次世界大戦とモダニズム』などがある。Allyson Booth の *Postcards from the Trenches* の副題に示されているように、現在は「モダニズムと第一次大戦の間の空白を克服する」(*Negotiating the Space between Modernism & the First World War*) 時期だといえるのかもしれない。

本論はそれらの論考と同様に、モダニストエリオットと大戦の距離を克服することを目指すものである。具体的には、大戦を描かなかったエリオットの詩から明らかに大戦について述べてある行を見出し、考察を行う。そうするにあたり、まず1章では大戦下のエリオットの伝記的背景をたどり、エリオットが大戦をいかに捉えていたのかについて探る。そしてエリオットが大戦を支持し、自ら軍隊に志願していたこと、しかし終戦を迎えるまでその戦争に直接関与することができなかったことを明らかにすることで、エリオットを「非・戦争詩人」と位置づける。2章では、エリオットの詩に明確に示された大戦の断片を、『荒地』(*The Waste Land*) の第2部「チェスの遊び」(“A Game of Chess”) と「コリオラン」(“Coriolan”) の第1部「凱進行進」(“Triumphal March”) に見出し、そこに描かれている大戦が、兵士の目ではなく、一般市民の目を通して描かれたものであることを明らかにする。そしてエリオットがそのようにしか大戦を明示しなかつた理由を、戦場に行

けなかったという大戦下のエリオットの伝記的背景と合わせて考察する。

1. 戦場に行けなかった詩人

1914年、哲学を志す学生だったエリオットは学位取得へ向けた研究のためアメリカからヨーロッパへと渡ってきており、7月にはドイツを訪れていた。そして8月1日、ドイツがロシアに宣戦布告し、ドイツ対ヨーロッパ諸国間の戦争が始まったまさにそのとき、夏期講座に参加するため、エリオットは渦中のドイツ、マールブルグにいた。そして開戦間もない混乱のさなかドイツ国内を脱出し、急遽イギリスへと渡ることとなったのである。そして8月4日、イギリスが参戦を表明し、開戦間もない戦争はいよいよヨーロッパ中を巻き込む大戦争へと拡大していく。開戦当時、イギリスにおいて新たに始まったこの戦争は「最後の戦争」「戦争をなくすための戦争」というスローガンのもと熱狂的な興奮によって迎えられた。イギリスは開戦当初から1915年までは徴兵制ではなく志願兵制がとられており、入隊志願は国民の自由とされていたわけであるが、それにもかかわらず1914年12月の時点でイギリスとアイルランドから100万人の志願兵が集まったという（ウィンター 21）。このような状況下、エリオットも同様に興奮をもって始まったばかりの大戦を捉えていた。開戦当初のエリオットの熱狂の様子は、たとえばイギリスが参戦したひと月後の1914年8月8日（または7日）、兄のヘンリー（Henry Ware Eliot, Jr）に充てた手紙に詳しい。この手紙の中でエリオットは、始まったばかりの戦争を“the ultimate event”と呼び、この戦争に対して絶大な信頼を寄せていると述べている（*The Letters of T. S. Eliot. Volume 1* 56）。² また同日に書かれたエレナ・ヒンクリー（Eleanor Hinkley）に宛てた手紙の中では、友人同士が戦っている現状を複雑に思いながらも、“I should certainly want to fight against the Germans if at all”と述べている（LE 58）。つまりこれは、「機会さえあればドイツとの戦いに参加したい」というエリオットの戦争参加への意志表明なのである。このようにエリオットは開戦当初、ドイツとの戦争に極めて肯定的な姿勢を示している。また当時、エリオットは実際に将校として戦地に赴くために、将校養成部に入ろうとしていた。それは同年10月14日、エレナ・ヒンクリーに宛てた手紙に表れている——“I should have liked to have gone in to the training corps myself, for the sake of being able to take my exercise with the Englishmen, but they won't take a foreigner (LE 62)”。この手紙には、エリオット自身は「将校養成団」に入りたかったのだが、「彼らは外国人を取るつもりはなかった」ためにそれが許されなかったことが述べてある。以上のように開戦当時の世論と同様、エリオットは戦争を熱狂とともに迎えており、実際に戦争に直接参加することさえ望んでいたのである。しかし当時アメリカ人であったエリオットには参戦義務がない代わりにその権利も与えられなかった。そのため石川慎一郎の言葉を借りれば、エリオットは「銃後に取り残された者の立場から戦争を見つめることとなった」のである（石川 167）。

大戦は開戦当初一般に短期間で終結するものと考えられていた。小関隆がいうように「一般市民の多くは、『クリスマスまでには終戦』にいたるものと捉えていたのである（小関 12）。しかし大戦は予想に反して長期化し、さらに戦場で繰り広げられる熾烈な塹壕戦により歴史上類をみないほどの膨大な戦死者を出した。そしてイギリス国民の戦争への熱狂は急速にかげっていくこととなった。そのためイギリスは従来の志願兵制では兵力維持が困難となり、1916年1月5日、兵役法案の

提出によって志願兵制を改め、徴兵制へと移行した。その結果、義務化された軍隊への入隊により戦死者はさらに増え、また良心的兵役拒否者や絶対的兵役拒否者など、新たな犠牲者が現れることとなった。エリオットも当時のイギリス国民と同様、大戦に対して複雑な感情を抱いていた。徴兵制がしかれた5日後の1916年1月10日、コンラッド・エイケン（Conrad Aiken）に宛てた手紙の中で、エリオットは友人のジーン・ヴェルドナル（Jean Verdenal）が戦死したこと、徴兵制が通ったこと、知人の出版者がどうやら徴兵されたいらしいことなどを述べ、“we are very blue about the war”と戦争への失望の意を表している（LE 125）。

しかしながら、1917年4月6日、これまで外国人として戦局を眺めるしかなかったエリオットに転機が訪れることとなる。これまでモンロー主義に基づきヨーロッパに対して中立を保ち続けたエリオットの母国アメリカが、潜水艦による無差別攻撃を繰り返したドイツに対して宣戦布告をしたのである。こうしてアメリカの参戦によって、これまであきらめていたエリオットの戦争への参加が叶えられる状況がいよいよ整ったわけである。この際のエリオットの高揚のほどは、その2日後に妻ヴィヴィアン（Vivienne Haigh-Wood）がエリオットの母シャーロット（Charlotte Champ Sterns Eliot）に宛てて書いた手紙の中からうかがい知ることができる——“The fact that America has declared war is rather terrible to me. I so dread that Tom might have, some day, to fight. And yet I think he would almost like to (LE 173)”。この手紙の中でヴィヴィアンは、エリオットが「いつか戦わなくてはならないかもしれない」ことをひどく恐れているのだが、一方でエリオットの様子はむしろ「ほとんどそうしたがつている」ようにみえるというのである。そして実際にエリオットは1918年8月、アメリカ海軍に志願することとなる。自身の志願についてエリオットは、8月5日、ウィンダム・ルイス（Wyndham Lewis）に宛てた手紙の中で、“This[negotiation] must be settled within next few days”と述べている（LE 240）。つまりエリオットの海軍への入隊は「あと数日」のところまで決まりかけていたのである。しかしまたしてもエリオットの軍に入隊するという期待は裏切られることとなる。というのも入隊検査の際、持病のヘルニアが原因で、エリオットは戦地勤務には不適合とされてしまうためである。このようにして、エリオットが兵士として戦場で戦う機会は完全に失われることとなった。

しかしその後エリオットは兵士として戦地に赴くことは断念するのだが、また別の形で戦争に関与する道を模索する。具体的には陸軍諜報部、次いで海軍諜報部への入隊を志願するのである。そのいきさつについては1918年11月13日、ジョン・クイン（John Quinn）に宛てた手紙に詳しく述べられている。その手紙によると、エリオットはまず陸軍諜報部の将校任命辞令を得る目的でパウンド（Ezra Pound）やオックスフォード大学のマートン校の学部長を含む16名の著名人たちから推薦文を書いてもらった。しかしその折、海軍諜報部からエリオットが彼らにとって最も適任であると勧誘を受け、海軍よりすぐに海軍諜報部に入隊すれば通信担当下士官長の役職を保証し、さらに数ヶ月で将校任命辞令を与えると約束された。そのためエリオットは陸軍諜報部入隊の件を取り消し、海軍諜報部への入隊のため当時勤めていたロイズ銀行を離れる準備を始めた。それから海軍の手続き上の問題で1週間待たされた後、いよいよ入隊が許可されようとしていたのだが、その時にエリオットが兵役に登録していたことが判明し問題となる。この兵役は全ての市民に義務付けられたも

ので、すでに無効となっているのだが、この手続きのためにさらにエリオットは2週間入隊を延期されることとなる。この入隊の延期が相次ぐ中でエリオット個人の財政状態は困難なものとなり、やむをえずエリオットは一旦ロイズ銀行に戻るることとなる。そして海軍諜報部への入隊許可を待っている間に休戦協定が結ばれた、というのである (LE 254-55)。

これまでみてきたとおり、エリオットは大戦が勃発した当時から直接的に戦争に関与することを強く望んでいた。しかし開戦当時は国籍の問題、アメリカの参戦当時は健康上の問題により兵士として戦場に赴くことはできなかった。さらに諜報部員としての志願は事務手続き上の問題で果たされることがないままに終戦を迎えることとなった。終戦のその時まで望み続けたにも関わらず、ほとんど運命のいたずらとでもいべき不運が重なったことにより、軍に属し直接戦争に携わるという「個人の制御を超越したこの偉大なできごとに寄与する」行為はエリオットにとって願っても叶わぬこととして終わったのである (Krockel 97)。

このようにしてエリオットは大戦の時代に渦中のヨーロッパにおり、さらにそれを望みながらも、兵士として戦場に行くことも、また別の何らかの形でそれに関与することもできなかった。そして次章で詳しく述べるが、このようなエリオットの伝記的背景は彼の詩作にも影響を及ぼしており、エリオットは詩人として戦地の惨状を描くことも兵士の死を描くこともできなかったのである。このような大戦下のエリオットの伝記的背景は、たとえば戦場で塹壕戦を経験し、戦場の惨状を克明に作品に描き、終戦のわずか1週間前に戦地で散った、戦争詩人を代表するオーウェン (Wilfred Owen) と極めて対照的である。つまり、エリオットは単に大戦を描かなかったのではなく、望んでいながらも戦場に行けなかったがゆえに大戦を明確に描くことができなかったのであり、その意味で戦争詩人とは対極に位置する詩人、すなわち「非・戦争詩人」だといえるのである。以上の理由で本論ではエリオットを「非・戦争詩人」と定義する。しかしこれは単にエリオットは戦争詩人ではなかったといっているのではない。作品のみならず、伝記的背景さえも戦争詩人とは極めて対照的な、戦争詩人にあらざる詩人であったという意味で「非・戦争詩人」なのである。

2. 「非・戦争詩人」が描いた大戦の2つの断片

前章では、大戦下、エリオットが大戦を支持し、戦争と何らかの形で直接関与することを望んでいたにも関わらず、不運が重なったことにより結局最後までその願いが果たされなかったことを明らかにした。エリオット自身は戦後間もなく出版した「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”)の中で、完璧な芸術家ほど個人的苦悩と生み出される作品が完全に分離されているものだといっているが (“Tradition and the Individual Talent” 18)、しかし荒木がいうように、大戦後にエリオットが書いた詩は「すべて広い意味で『戦争詩』と呼んでよい」ほどに大戦のエコーで満ちている (荒木 110)³。つまりおそらくエリオットが大戦下におかれたこのような状況は、エリオットの詩作に何らかの影響を与えていたと考えられるのである。そこで本章では、戦場に赴けず、最後まで戦争に関与できなかった経験が、エリオットの詩の中にいかに描かれているかについて考察を行う。具体的には、エリオットが明確に大戦を描写した数少ない作品として、『荒地』の

第2部「チェスの遊び」と「コリオラン」の第1部「凱行進」を扱うことにする。

1922年に出版され文学の歴史に名を刻むこととなる『荒地』であるが、その構想自体は1914年ごろからあり、大戦期間中にはすでに断片的に書き始めていたという。このような経緯から荒木は『第一次大戦とモダニズム』の中で、大戦勃発後のエリオットの詩に「直接的な言及を避けて、暗に大戦を想起させる記述が多く見られる」ことを指摘した上で、「『荒地』は、モダニストの戦争詩である」と述べている（荒木 110）。そして荒木は『荒地』第1部「死者の埋葬」（“The Burial of the Dead”）の一部を引用し、エリオットの描く死を、大戦下の一般市民にとって死体が隠されたものだったという歴史的背景と照らし合わせて考察を行っている。

荒木が指摘するように、エリオットの作品に満ちている大戦を思わせる描写の描かれ方は極めて暗示的であり、連想と推測と検証によってようやく大戦が想起される類のものがほとんどであるといえる。しかし一方で、『荒地』からは我々の連想や推測を必要としない、明らかに大戦に関する描写を見出すことも可能である。そこで本章では、まず『荒地』に描かれた明確に大戦と関連する描写を第2部「チェスの遊び」に見出し考察する。

「チェスの遊び」は大きく3つのパートに分かれている。冒頭のパートは上流階級にも娼婦にもみえる女の部屋の様子が描かれており、最後にその部屋の窓から飛び降り自殺をする何者かが描かれる。そして2つ目のパートでは男に何か決断を迫る上流階級の神経質な女と、それをかわす男とのチェスのようなやり取りが描かれる。そして今回問題となるのは3つ目のパートである。

When Lil's husband got demobbed, I said --
I didn't mince my words, I said to her myself,
HURRY UP PLEASE IT'S TIME
Now Albert's coming back, make yourself a bit smart. (“A Game of Chess” 65)⁴

3つ目のパートでは、語り手である女が別の何者かに向かってリルの噂話をしている。George Williamson が指摘するように、途中大文字で挿入されるのは店じまいを告げるパブか酒場の店員の声であり、どうやら場面は庶民向けの飲み屋らしい（Williamson 137）。そしてその噂話の中で、語り手の女はリルの夫アルバートが「復員した」ときのことを語っている。B. C. Southam がいうように“demobbed”とは“demobilized”が短縮された俗語である（Southam 79）。前章で述べたように徴兵制がしかれ、兵が動員（“mobilize”）されたのが大戦下であったことを考えると、この“demobbed”という言葉は大戦を示唆しているといえる。

そして復員兵の存在もまた、それだけで戦争を思わせるものであるといえるだろう。特に大戦後のイギリスは多数の復員兵であふれており「多数の負傷兵や、『戦闘神経症（‘shell-shock’）』に苦しむ者をどのように再適応させるか」が問題となったという（鈴木 71）。⁵ また、清水一嘉によると、大戦後には200万の「負傷者、毒ガスに侵された者、戦闘神経症を患った者、盲目になった者」

が復員兵として「回復の望みのないまま戦場から帰ってきた」という(清水 viii).⁶ つまり『荒地』が出版された大戦後間もない頃の読者、あるいはエリオット自身にとって、復員兵とは大戦後の社会が抱える深刻な問題を示唆する存在であり、当然大戦を直接的に想像させるものだったといえるのである。

さらに、その後の行でパプの語り手の女は復員兵アルバートについてこのように続ける——“He’s been in the army for four yeas” (“A Game of Chess” 66). つまりこの復員兵アルバートは戦場に4年間いたわけである。そしてこの4年という期間は戦争が行われた期間と符合する。徴兵された兵士の復員を表す“demobbed”, 当時社会問題となっていた復員兵, そして4年間の兵役。以上の条件が示されていることからわかるように, アルバートが参戦していたらしい戦争は, 明らかに大戦なのである。そしてこの大戦からの復員兵アルバートこそ, 本章で論じている『荒地』から見出される明確な大戦の描写の1つである。荒木が指摘していたように, エリオットは「直接的な言及を避けて, 暗に大戦を想起させる記述」をしていることがほとんどなのであるが, その中でこのアルバートの存在は暗にではなく, かなり直接的に大戦を想起させるものであるといえるだろう。⁷

本章では引き続き, エリオットが明確に大戦を描いていると思われるもう1つの詩をみる。大戦の終結からしばらく経った1931年に公開された作品「コリオラン」の第1部「凱旋行進」がそれである。この「凱旋行進」というタイトル自体戦争を思い起こさせるものであるが, 作品全体を束ねるタイトル「コリオラン」は Williamson が指摘するようにシェイクスピアの『コリオレイナス』(*The Tragedy of Coriolanus*) を意味するものであり (Williamson 195), またそのモデルとなった古代ローマの伝説的将軍コリオラヌスを意味するものでもある。つまりこれらのタイトルは古代ローマの軍事的英雄が行う凱旋行進の姿を喚起しているのである。⁸

作品の冒頭では, そのタイトルどおり英雄を思わせる何者かの凱旋行進が描かれている。冒頭はその凱旋をひと目みようと集まった群集の描写で始まる。

And the flags. And the trumpets. And so many eagles.
How many? Count them. And such a press of people.
We hardly knew ourselves that day, or knew the City.
This is the way to the temple, and we so many crowding the way.
So many waiting, how many waiting? What did it matter, On such a day?
Are they coming? No, not yet. You can see some eagles. And hear the trumpets.
Here they come. Is he coming? (“Triumphal March” 127)

街には英雄を迎えるための軍旗, トランペットなどが並ぶ中, 多くの「鷲」があるという。古代ローマでは軍旗と同様に, 「鷲旗」(aquila) と呼ばれる鷲の像が戦場に持っていかれたとされる。⁹ この行で言われる「鷲」とは, その古代ローマの鷲の像を意味するものであろう。そして街道には「自分自身や街がほとんどわからなくなる」ほどの群集がひしめきあい, 凱旋行進の到来を待っている。

つまり、やはりここに描かれているのは古代ローマの凱旋を待つ人々と解釈するのが妥当であり、これだけの群集を集めるほどの英雄が凱旋してくるのだと想像されるのである。そしてとうとう凱旋行進が語り手の前に訪れる。そこで語り手は「彼は来たか？」とその英雄の到来をほのめかすのである。

しかしすぐあとの行をみると、状況は一変する。

What comes first? Can you see? Tell us. It is

5,800,000 rifles and carbines

102,000 machine guns

28,000 trench mortars

53,000 field and heavy guns

I cannot tell how many projectiles, mines and fuses,

13,000 aero planes

24,000 aero plane engines,

50,000 ammunition waggons,

now 55,000 army waggons,

11,000 field kitchens

1,150 field bakeries. (“Triumphal March” 127)

凱旋行進の先頭を飾るのは、おびただしい数の武器や軍需品なのであり、さらに列挙されているのはライフル、カービン銃、マシンガンなど、いずれも現代の戦争を象徴する武器ばかりなのである。中でも「塹壕迫撃砲」(trench mortar) は熾烈な塹壕戦が繰り広げられた大戦において初めて用いられた兵器である。つまりここで示されているのは、この凱旋が英雄や兵士たちが行う古代ローマの戦場からの凱旋ではなく、明らかに大戦の戦場からの凱旋なのである。

大戦は英雄不在の戦争である。荒木が指摘するように、大戦が人々に与えたのは数量の衝撃であり、用いられた膨大な量の兵器により「個人を無名化し数の中に埋没させ」、英雄を生むことはなかった(荒木 59)。しかし森山がいうようにモダニストであるエリオットは「あらゆる戦争を『戦争』という類型に収めて同一視」する(森山 493)。すなわち、エリオットは古代から現代に至るまでのすべての戦争を「凱旋行進」の中で重ねようと試みるのである。そのためこの作品では、ここに引用した大戦の膨大な量の軍需品が到来した場面の中の、神々しく英雄的な何者かである「彼」の到来が描かれている。¹⁰

「凱旋行進」の冒頭では、明らかにローマ古代の英雄の凱旋行進が描かれている。しかしその後、当時の最新の兵器を含む膨大な量の軍需品がその数量とともに列挙されることで、英雄の行進は英雄を生まなかった大戦からの凱旋行進へとその姿を変えるのである。以上から、この詩行もまた、我々読者に大戦を直接想起させるものであるということができよう。

これまで本章では、『荒地』の「チェスの遊び」と「コリオラン」の「凱旋行進」に具体的に描かれた大戦の断片についてみてきた。「チェスの遊び」では『荒地』が出版された当時の、終戦後間もない頃頃に社会問題となっていた復員兵が示されていた。そして「凱旋行進」では大戦で用いられた膨大な数の兵器とともに行われる凱旋行進が描かれていた。これらはいずれも大戦の1つの場面を具体的に、そして明確に映し出したものであるといえるだろう。

ところでエリオットが描いたこの2つの大戦の断片にはある共通点がある。というのも、興味深いことにこれはいずれも戦場で戦うものや戦場そのものではなく、戦場から帰ってきたものであるという点で共通しているのである。すなわち、復員兵は戦場で戦い故郷への帰還が認められたものとして、そして凱旋行進は戦場で勝利を収めたものたち（あるいはそこで用いられた膨大な兵器）として、戦場から一般社会に帰ってきたものだという点で共通しているのである。なぜエリオットはこのように「戦場から帰ってきたもの」たちを詩の中に描き出したのか、その理由について本章では以下の2つの可能性を示す。

まず、その理由の1つとして、戦場へ行くことができなかつたエリオットにとって、描くことができる大戦はそれしかなかった、という点が挙げられるだろう。風呂本武敏は大戦で兵士が経験した「深刻さでそれに匹敵する事例を見出すのが困難」なほどの体験として「塹壕体験」を挙げている（風呂本 186）。また荒木がいうには、大戦の戦場で繰り広げられたのは英雄的な戦いではなく、「塹壕内で『穴居人』のように」「死体と同居」するような塹壕戦であったという（荒木 51）。そして戦争詩人を代表するオーウェンは塹壕で戦い、その惨状を自らの詩に残している。¹¹ つまり大戦当時、その戦場の凄惨さを象徴するのは塹壕戦の恐怖だったのである。しかし当然のことながら、戦場に行くことができず、市民社会からそれを眺めることしかなかったエリオットにとって、そのような戦場の惨状は直には知りえなかつたものである。さらに Booth によると、大戦下の市民たちからは死体はおおい隠されており、市民たちは兵士やその死について一度もその死体を見ることなく語らなければならなかつたという（Booth 21）。つまり街で市民生活を送っているものたちからは塹壕戦といった戦地の惨状のみならず、兵士たちの死さえも不可視なものだったのである。このような状況下でエリオット自身が確かに目撃できるのは、市民生活を送りながら見ることができた大戦の一場面、すなわち戦地から生還した復員兵や凱旋行進のみだったと考えられる。つまり戦場に行けなかつたエリオットにとって、そこで戦う兵士の目を通したリアルな戦場を描くことは不可能であり、その作品には一般市民として見ることができた大戦の断片として戦場からの帰還者を描くことしかなかったと考えられるのである。

そしてもう1つの可能性として、エリオットが復員兵や凱旋行進の背後に「戦場」を見ていたという点があげられる。エリオットは1917年6月13日、目下行われている大戦について父ヘンリーに宛て次のようなことをいっている——“I see the war partly through the eyes of men who have been and returned, and who view it” (LE 183)。前章でみたとおり、エリオットはそれを望んでいながらも、軍隊に入隊することも戦場に赴くこともできなかつた。ここに引用した手紙からわかるのは、そのようなエリオットにとって、大戦とは自らの目ではなく、そこに赴き、そこで戦い、戦場を目撃し、そして帰ってきた人たちの目を通してのみ「部分的に」知りうるものだったということなのである。

つまりエリオットにとっては、戦場から生きて帰ってきたものたちこそ本当の戦争とはいかなるものかを部分的にでも伝えてくれる存在であったといえる。そのためエリオットは彼らを象徴する復員兵や凱旋行進を、自らを含む市民社会と戦場をつなぐ唯一の存在として詩に忍び込ませることで、戦場の一端をそこに映し出そうとしていたと考えることができるのである。しかし、前章で述べたようにエリオットは自ら軍に志願し戦争に直接関与することを望んでいたのであり、おそらく彼は自らの目でその戦争を見つめることを望んでいたのである。そのためこのような介在者を経て、大戦という人類史上究極のできごとを間接的に眺めなければならなかったことは、エリオットにとって本望ではなかったはずである。そのことを念頭において考えると、エリオットがその作品にこれら戦場からの帰還者たちを描いたのは、自らと戦場とのせめてものつながりを示すためだと考えられるのである。

以上から、エリオットが「チェスの遊び」と「凱旋行進」に明確に描き出した大戦の断片、すなわち復員兵と凱旋行進は、1つには戦場に赴けなかった「非・戦争詩人」であるエリオットが一般市民として目撃することができた唯一の大戦であり、そしてもう1つにはエリオットが自身と戦場をつなぐものとしてかろうじて描くことができた唯一の存在であったといえることができるだろう。

結論

本論ではこれまで、大戦が行われていた時代におけるエリオットの伝記的事実をたどり、その後、エリオットが大戦を明示した数少ない作品である「チェスの遊び」と「凱旋行進」から、そこに描かれた大戦の断片について考察を行った。1章ではエリオットが大戦を強く支持し自ら軍に志願していながらも終戦を迎えるまで直接戦争と関わるができなかったことを明らかにし、エリオットを「非・戦争詩人」と定義した。そして2章では、エリオットがその作品の中に明示した大戦が、兵士ではなく一般市民がみた大戦の一場面であり、そこに描かれていたのは復員兵や凱旋行進など、かつて戦場にいて戦場から一般社会に帰ってきたものたちの姿であることを明らかにした。それは戦場に行けなかったエリオットが目撃できた唯一の大戦を象徴するものであり、またエリオット自身と戦場とのつながりをかろうじて表すことができる唯一の存在でもあったといえる。

大戦中、エリオットは母に宛てて次のようなことをいっている——“I wish that our country might have a chance to refresh its memory as to what war really is like” (LE 174)。これは母国アメリカが大戦への参戦を表明した時期にエリオットが書いた手紙の一部であるが、エリオットはここで、母国がこの大戦を戦うことで「戦争が本当はいかなるものか」について「記憶を新たにすること」を願っている。Krockelはエリオットがここで述べるアメリカが新たにすべき戦争の記憶とは南北戦争のことを指していると指摘している (Krockel 97)。つまりエリオットは母国アメリカが大戦に参戦することで、50年前に行われた南北戦争以来更新されていない「戦争が本当はいかなるものか」という古い記憶を新たにできると考えているのである。しかし戦場に行けず、戦争に関与することもかなわず、「本当の戦争」の記憶を新たにできなかったのがエリオット自身であったことは本論でこれまでみてきたとおりである。つまりエリオットにとって「戦争が本当はいかなるものか」という記憶は過去のままとどまっているのであり、戦場のリアルな「今」を彼は知りえなかったのであ

る。そのためエリオットは自らの作品に大戦を描く際、連想と推測と検証を重ねなければそれとわからないほど暗示的に描写することを常とした。「非・戦争詩人」であるエリオットに戦場は描きえなかったのである。そしてエリオットが唯一明確に描くことができたのは、戦場の惨状や兵士の死ではなく、街にあふれた復員兵や戦地からの凱旋行進といった、自らや一般市民が目撃することができた大戦の一場面のみだったといえる。しかし一方でエリオットと、そして恐らく戦時下の多くの市民たちは、戦場に行き、戦場を見、そして帰還してきたものたちの目を通して、部分的に戦争を伝え聞くことであればできた。つまり復員兵や凱旋行進とは、市民社会から目撃できた唯一の大戦であったと同時に、戦場をリアルに体験してきた戦場の語り部を意味するものでもあったと考えられるのである。そしてエリオットは「非・戦争詩人」として復員兵や凱旋行進を明確に描くことで、それらを介してかすかに聞こえてくる戦場の轟音をなんとか自らの作品に示そうとしていたと考えられるのである。

¹ 以下、特別な理由がない限り、第一次大戦はすべて「大戦」と表記する。

² エリオットの手紙の引用はすべて *The Letters of T. S. Eliot. Volume 1* より行う。以下 *LE* と表記する。

³ エリオットの評論の引用はすべて *Selected Essays* より行う。

⁴ エリオットの詩の引用は全て *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* により行う。かっこ内には引用した詩の章のタイトルを示す。

⁵ 「shell-shock」とは、大戦で熾烈を極めた塹壕戦において、砲撃の爆音や衝撃によって引き起こされると考えられていた症状である。オーウェンも戦闘の際近くで炸裂した砲弾の影響でこの症状にかかったとされる (Champion 35)。

⁶ また、清水は大戦の影響で「性の風紀がみだれ、婚姻外出生が増え」た上、避妊が増えたという社会的背景を紹介している (清水, viii)。つまり大戦によって性的な退廃が起こり、セックスは本来の意味を失い始めていたのである。このような大戦が及ぼした性の退廃もまた「チェスの遊び」に描かれている。パブの語り手の女は、リルの年令のわりに年老いた容姿を指摘した際、リルが次のように反論したと語っている——“It’s them pill I took, to bring it off” (“A Game of Chess” 66)。“Bring it off”とは墮胎のことであり、つまりリルは墮胎のための薬の副作用で老けてみえるのだと反論しているわけである。墮胎とは子孫を残すという本来的なセックスの意味を完全に否定するものであり、当時の大戦によって退廃した性がここに表されているといえる。

⁷ しかしこのアルバートの復員について語るのが、アルバート自身でもその妻リルでもなく、パブで噂話を花を咲かせる女であるという点は興味深い。この語り手の女が主に関心を抱いているのはアルバートの妻リルが差し歯を入れなかったことやその年齢のわりに老けた容姿、そしてその夫婦の性生活など、大衆パブに見合った下世話なものばかりなのである。この女の口からは戦地や戦争のことについては一切語られることはない。また、戦場で戦いそこから生還する復員兵についてもアルバートという名があげられるばかりであり、その復員については単なる噂話の複線として無味乾燥に語られるのみなのである。つまりエリオットはこの場面において明らかに大戦の1つの断片を描いているわけであるが、その語り手を当事者ではない第3者、それも大衆パブで酒を飲みながら下世話な噂話をするような女に設定することで、そこに何らかの価値を一切発生させることなく、復員を単なるできごととして映し出しているのである。

⁸ エリオットはシェイクスピアの『コリオレイナス』を高く評価しており、「ハムレット論」 (“Hamlet”) の

中で“*Coriolanus* [...] is [...] Shakespeare’s most assured artistic success”と賞賛している (“*Hamlet*” 144).

⁹ 「鷲旗」についてはタキトゥスの『年代記』より、翻訳者国原吉之助による注を参照（タキトゥス 19）。

¹⁰ 「彼」と呼ばれる英雄的な何者かの姿は次のように神々しく描かれる——“There is no interrogation in his eyes / Or in the hands, quiet over the horse’s neck, / And the eyes watchful, waiting, perceiving, indifferent. / O hidden under the dove’s wing, hidden in the turtle’s breast, / Under the palmtree at noon, under the running water / After the still point of the running world. O hidden” (“*Triumphal March*” 127-28).

¹¹ オーウェンはその詩の中で塹壕のリアルな惨状を描いている。たとえば「歩哨」 (“*The Sentry*”) では塹壕に閉じ込められた兵士たちに浴びせられる銃弾、降り注ぐ雨による塹壕内での水死のおそれ、塹壕内の悪臭などが描かれている（Owen 61）。

Works Cited

- Booth, Allyson. *Postcards from the Trenches: Negotiating the Spaces between Modernism and the First World War*. New York: Oxford UP, 1996.
- Champion, Neal. *Poets of the First World War*. Oxford: Heinemann, 2002.
- Eliot, T. S. “The Game of Chess”, *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber, 1969.
- . “Hamlet”, *Selected Essays*, London: Faber, 1932.
- . “Tradition and the Individual Talent”, *Selected Essays*, London: Faber, 1932.
- . “Triumphal March”, *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber, 1969.
- Eliot, Valerie. Ed. *The Letters of T. S. Eliot Vol1 1898-1922*. London: Faber, 1988.
- Krockel, Carl. *War Trauma and English Modernism*. New York: Palgrave, 2011.
- Owen, Wilfred. “The Sentry”, *The Collected Poems of Wilfred Owen*. Ed. C. Day. Lewis. 1971 ed. London: Chatto, 1963.
- Southam, B. C. *A Student’s Guide to the Selected Poems of T. S. Eliot*. London: Faber, 1968.
- Williamson, George. *A Reader’s Guide to T. S. Eliot*. London: Thames, 1955.
- 荒木映子『第一次世界大戦とモダニズム——数の衝撃』世界思想社，2008年。
- 石川慎一郎「2度の大戦とイギリス詩人—ブルック・オーウェン・エリオット・トマスに見る文学と戦争の関係—」『言語文化学会論集』12（1999）：163-178。
- 小関隆『徴兵制と良心的兵役拒否——イギリスの第一次世界大戦経験』人文書院，2010年。
- 清水一嘉「第一次大戦とイギリス—はしがきに代えて—」『第一次大戦とイギリス文学—ヒロイズムの喪失—』清水一嘉，鈴木俊次編。世界思想社，2006年。
- 鈴木俊次「第一次大戦と D. H. ロレンス—男同士の絆と帰還兵の問題を中心に—」『第一次大戦とイギリス文学—ヒロイズムの喪失—』清水一嘉，鈴木俊次編。世界思想社，2006年。
- 風呂本武敏「戦争詩再考」『第一次大戦とイギリス文学—ヒロイズムの喪失—』清水一嘉，鈴木俊次編。世界思想社，2006年。
- 星野美賀子「創造とその母体」『モダンにしてアンチモダン——T. S. エリオットの肖像』高柳俊一，佐藤亨，野谷啓二，山口均編。研究社，2010年。
- 森山泰夫「二つの大戦と T. S. Eliot の文学活動の本質」『山形大学紀要（人文科学）』8（1977）：487-513。
- ウィンター，J. M.『20世紀の歴史 14 第一次世界大戦（下） 兵士と市民の戦争』深田甫監訳。平凡社，1990年。
- タキトゥス「年代記」『タキトゥス 世界古典文学全集 第22巻』国原吉之助訳。第4版。筑摩書房，1983年。

ボンド, ブライアン『イギリスと第一次世界大戦 歴史論争をめぐる考察』川村康之訳. 芙蓉書房出版, 2006年.

(2012年12月7日 受理)